

東京大学名誉教授／放送大学客員教授／演出家

渡邊守章氏

「ポール・クローデルと能、能とクローデル」

(作成：渡邊守章)

- 1) クローデルの地平——問題意識
- 2) 能を見るクローデル——視線の現象学
- 3) 能の解釈学——記憶の劇場
- 4) グローバル化の地平

見所のクローデル《資料》

1. クローデル略年譜

- 1869年 (明治元年) 8月6日 東北フランスに生まれる。父は登記所の収税官。
- 1882年 姉カミーユの強い意思で、父を除き家族はパリへ出る。
- 1886年 初夏 ランボー『イリュミナシオン』により詩に目覚める。
同年12月 パリ、ノートル＝ダム大聖堂における「回心」。
- 1887年 マラルメの火曜会に出る。
- 1890年 外交官試験に合格。処女戯曲『黄金の頭』無署名出版。
- 1893年 ニューヨーク赴任。次いでボストン赴任。
- 1894年 アイスキュロス『アガメムノン』の翻訳。
- 1895年 (明治28年) 中国(上海)赴任。福州、漢口。『東方の認識』所載の散文詩を書き始める。
- 1898年 (明治31年) 5月—6月 最初の日本旅行(東京、日光、静岡、京都)。
- 1900年 聖職への意思の挫折。中国への帰路、船上で出会った人妻との禁じられた恋。
1905年まで福州。
- 1901年 戯曲集『樹木』出版。
- 1905年 恋の破局。フランスでの結婚。戯曲『真昼に分かつ』。中国への三度目の赴任。北京、天津。
- 1909年 プラハ。戯曲『人質』。
- 1912年 戯曲『マリアへのお告げ』パリ初演。
- 1914年 第1次世界大戦勃発。帰国。
この間作曲家ダリウス・ミヨーのために、アイスキュロス作『供養する女たち』『恵みの女神たち』の翻訳。
- 1917—1919年 ブラジル(特命全権公使)。作曲家ダリウス・ミヨーを私設秘書として伴う。
南米巡業のニジンスキーを見る。ニジンスキーを想定して、バレエ台本『男と欲望』を書く。
- 1921年 (大正10年) 11月 東京着任(大使)。1919年に想を得た長編戯曲『繻子の靴』を書き続ける。
- 1922年 (大正11年) 4月 プリンス・オヴ・ウエールズ歓迎祝典、宮中にて舞楽『春庭

- 花』『納曾利』。
- 5月 大坂で文楽。
- 6月 帝劇『忠臣蔵』（三段目「殿中刃傷」、六段目「勘平切腹」）
- 7月 詩篇『内濠十二景』を書く。
- 8月 日光における講演。
- 9月 5世中村福助のための舞踊劇台本『女と影』
『繻子の靴』『二日目』を書き終える。
- 10月22日 能『道成寺』（シテ：大槻十三、ワキ：宝生新）
- 1923年（大正12年） 1月 新富座
- 1月20日 厩橋、梅若発会：梅若六郎（後の実）『翁』、（梅若万三郎『弓八幡』）、
梅若六郎『羽衣』
- 2月4日 観世元滋（後の左近）の『景清』
- 16日 九段細川舞台：桜間金太郎（後の弓川）の『角田川』
- 中旬 帝劇で歌舞伎。
- 3月26日 帝劇で『女と影』（羽衣会）
- 5月 新潮社の雑誌『日本詩人』「クローデル特集」
- 9月1日 関東大震災。『繻子の靴』のほぼ完成していた「三日目」を焼失。
- 1924年（大正13年） 1月6日 観世発会で観世元滋の『翁』
『繻子の靴』『三日目』を一応完成。
- 10月 『繻子の靴』一応完成。
帝劇にて大倉男爵米寿の会。梅蘭芳を見る。
- 1925年（大正14年） 1月末 休暇のため帰国。
- 1926年（大正15年） 2月末、日本着。
- 春 日本文化論『朝日の中の黒い鳥』『能』などを書く。
- 5月 大坂。文楽と鴈次郎主演の『忠臣蔵』（六段目）
靖国神社舞台、観世喜之『砧』
- 6月 宝生会、武田喜男（後の光雲）の『蟬丸』
- 10月 豪華本『四風帖』（富田溪仙の扇面にクローデルの短詩）
- 11月 『雉橋集』
『百扇帖』
- 12月25日 大正天皇崩御。天皇葬儀のための仏国特命全権大使。
- 1927年（昭和2年） 2月7日 大葬。
- 2月12日 離日。駐アメリカ合衆国大使としてワシントンへ。
- 1928—1929年 『繻子の靴』初版豪華本。
- 1930年 『クリストファー・コロンブスの書物』初版。英語版の序文『劇と音楽』。
ベルリンのウンターデアリンデン歌劇場におけるオペラ版初演（音楽ダリユス・
ミヨー）。
- 1934年末 『火刑台上のジャンヌ・ダルク』（アルチュール・オネッゲル作曲、劇的オラト
リオ）

1938年 『知恵の饗宴』のための序文（「日本の能のアダプテーションの試み」、ミヨー作曲）

1943年11月 ジャン＝ルイ・バローによる『繻子の靴』初演（コメディ＝フランセーズ、音楽：アルチュール・オネッゲル）

（以後、クローデルの作品は始めバローの演出によって、後にはアントワヌ・ヴィテーズ等の演出家によって頻繁に上演されている。）

1955年2月 パリにて没。

（因みに、能・狂言の最初のパリ公演は1957年6月。ジャン＝ルイ・バロー劇団の最初の来日講演は1960年5月）

2. クローデルが読み得た文献

Noël Péri: *Cinq pièces de Nô*, Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient, 1911-1913 (éd. de vulgarisation, éd. Bossard, 1921) - *Oimatsu, Atsumori, Sotoba Komachi, Ohara gok, Aya no tsuzumi*,

Noël Péri: *Cinq pièces de N*, nouvelle série d'interprétation, B. E. F. E., 1920 - *Miwa, Tamura, Eguchi, Kinuta, Matsuyama-Kagami*.

Arthur Waley: *The No plays of Japan*, 1921 - *Atsumori, Ikuta-Atsumori, Tsunemasa, Kumasaka, Eboshi-ori, Hashi Bennkei, Kagekiyo, Hachi no ki, Sotoba Komachi, Ukai, Aya no tsuzumi, Aoi no uye, Kantan, H kaz, Hagoromo, Tanik, Ikeniye, Hatsuyuki, Haku Rakuten*.

B. H. Chamberlain: *Hagoromo in The Classical Poetry of the Japanese*, 1880
: *Kantan, Manjû, Sessyôseki, in Japanese Poetry*, 1910

Michel Revon: *Anthologie de la Littérature japonaise*, (1919), *Hagoromo*

E. Fenollosa et Ezra Pound: "Noh" or *Accomplishment*, 1916

3. クローデル観能記

日記（1921—1927）

能の現象学——身体・集中・意味の出現

『道成寺』——降霊術によって地底から再臨する怨霊＝女——悪魔払いの呪術——情念の劇の呪術的演劇表象

『翁』『羽衣』——「歳霊への奉獻」、大地を踏む魂フリ、呪術的模倣所作

——歌舞神聖起源論——天上から齎される祝福

——『オレスティア三部作』の構造（「復讐の女神」の「恵の女神」への変身）

『景清』——叙事詩的テーマ——老残の英雄の表象——親子の別離の演劇的強度

『角田川』——「純粹に人間的な」テーマ——子を奪われて狂女となってさ迷う母——悲嘆の演技的表象の強度（桜間金太郎の双シオリ）

『翁』

『朝日のなかの黒い鳥』『能』

複式夢幻能——解釈の鍵

能の解釈学あるいは解釈学的演劇としての能

『敦盛』
 『楊貴妃』
 『芦刈』
 『角田川』
 『道成寺』
 『羽衣』
 『翁』
 『詩人と三味線』（会話体エッセー）
 『砧』

4. クローデルの問題形成

1. 文化的地平

- ・ 反一近代、反一西洋——始原の演劇の探究
 アイスキュロス、ワーグナー、エリザベス朝演劇等
- ・ 「外部」の幻惑
 東洋演劇（1889年万博：安南の伝統劇、ジャワの宮廷舞踊）
 ニューヨークのチャナタウンの芝居
 広東の芝居等
- ・ 踊りへの関心——ニジンスキー

2. 舞台芸術のパラダイム転換

- ・ マラルメの問題形成＝「未来の群衆的祝祭演劇」のパラダイム
 - ① 韻文朗読オラトリオ
 - ① ワーグナーの神話的楽劇
 - ③ バレエ
 - ④ カトリックのミサとオルガン演奏会
- ・ 『ハムレット』モデル——「英雄」と彼を取り囲むコロス
- ・ 身体的表象の重視——「演劇の直接的な力」
- ・ 文字言語の誘惑

3. 世紀末の先駆的な実験

- ・ リュニエ＝ポーの「作品座」など「象徴派演劇」の冒険と挫折
 （夢遊病者的演技——運動の緩慢さ）

4. 中国と日本

- ・ 老荘の空無
- ・ 文字の幻惑
- ・ テキストとしての風景（『東方の認識』の散文詩）
- ・ 日本というテキスト（ページ、文字、余白、レイアウト）
 - 水墨山水、金碧障壁
 - 造園術（桂離宮、修学院離宮、大徳寺孤蓬庵・小堀遠州）
 - 茶道（大徳寺）

5. 身体性と瞑想——集中のありかた

5. 特権的な出会い

1. 劇詩人クローデルの頂点において——『繻子の靴』『内濠十二景』『百扇帖』等
2. 詩人大使の新しい使命の自覚の地平で——エッセイの誕生
3. 20世紀演劇の問題形成の先取りとしてのマラルメの再評価——日本の伝統演劇の理解の仕方の変容——新しい視線

ソルボンヌ大学名誉教授／ソルボンヌ大学院委員長

フィリップ・メナール氏

「マルコ・ポーロ『東方見聞録』のなかの日本のイメージ」

(作成：横山安由美)

《講演要旨》

マルコ・ポーロの『東方見聞録』は、13世紀のヨーロッパの人間が日本について語る、きわめて貴重な証言である。しかしながらマルコ自身はずっと中国に住んでおり、直接日本にきたことがない。いったい彼はどうやって日本の存在を知り、どのような視点からこの国をとらえたのだろうか。

『東方見聞録』については様々な言語による数多くの写本が存在する（明星大学は、1483年頃というきわめて初期のラテン語の刊本を所蔵）。たとえばフランス国立図書館蔵の fr. 2810 写本（1410-1412 頃）は、ジェノヴァの牢獄の中でマルコが物語作者ピザのルスティケッロに書き取らせたとされる中世フランス語版の写本で、その美しい彩色挿絵で知られている。こうした各種の中世写本を比較検討しつつ、さらに13世紀当時の日本や中国の様々な歴史資料と照らし合わせることによって、当時の日本についての実像と虚像を浮かび上がらせてゆく。

とりわけ1274年（文永の役）と1281年（弘安の役）の二度の蒙古襲来についての、西洋人側の描写と、竹崎季長『蒙古襲来絵詞』などの日本側からの描写の比較は興味深い。海上で敵を撃退した「カミカゼ（神風）」は本当にあったのか。それぞれの軍隊の人数が構成はどうだったのか。図像を見て比べてみよう。

実のところ『驚異の書』（『東方見聞録』の原題）は「驚異的事象」をかなり誇張していたようだ。マルコによる脚色は、当時のヨーロッパ人のもつアジアのイメージをよく示している。それと同時に、日本の側の改変もまた明らかになってくるのかもしれない。

参考：『全訳マルコ・ポーロ東方見聞録「驚異の書」fr. 2810 写本』月村辰雄・久保田勝一訳、岩波書店、2002年